琉球大学学術リポジトリ

はじめに：琉球大学を卓越した教育拠点に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲地, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42148

はじめに

― 琉球大学を卓越した教育拠点に ―

仲地　博（琉球大学大学教育センター長）

大学教授法の出版が目立つ。その中のベストセラーが、『大学の授業を変える16章』（浅野誠著、大月書店）である。1994年に初版がでて、今春までに11回の増刷を重ねている。著者の実践に基づく具体的方法を平易にかつ豊富に述べていることが売れている理由である。

その中に琉球大学としては、注目すべき一文がある。「琉球大学は、アメリカの大学システムをストレートにモデルにして出発した教育熱心さの体質をもっています。…おそらく日本の大学のなかでは、特筆すべき教育熱心な大学になっているのです」（199頁）。著者の浅野さん（若かりしころの氏を知っているので敬愛の念を込めて浅野さんと呼ばせていただきたい）は、琉大に17年在職した後、中部地方の私立大学に転職された方である。この文章は、琉球大学向けに書かれたものではないので、浅野さんの率直な評価と見てよい。今全国の大学から引っ張りだこの実践者からの評価であるので、ある程度の客観性もあると思う。我々は、このような評価を受けたことを喜びまた誇りにしたい。

しかし謙虚に琉大の現状を見れば、本自己点検報告書に現れたように、なお不十分であることは明らかである。否、「教育重視・学生中心」というユニバーサル段階の大学教育のあり方から考えると「不十分」以前の段階である。

また、浅野さんは琉大が教育熱心とは書いているが、教育効果が高いとは言っていない。熱意はあっても効果があがらないこともある。空回りをするわけである。

そもそも教育に十分ということはありえない。浅野さんの評価でいい気になることはできないのである。

琉球大学は個々の学生を大切にしきちんと付加価値をつけて卒業させる大学でありたい。卒業生が「琉球大学を選んでよかった、よい教育をしてくれた」と後で心から思える大学でありたい。琉球大学をして卓越した教育拠点にまで形成してゆきたいと念願している。

そのためには、教育を不断に考えることが不可欠である。その基礎に、厳しい自己点検と客観的評価がなければ、むしろ「危うし」である。大学教育センターは平成12年度の重点事業として文部省の支援を得て共通教育等の全体的な自己点検・自己評価を行う。学生アンケート、教官アンケートを基湛に共通教育等の理念から管理運営まで、琉大の共通教育等の全体像が現れるであろう。そしてさらに、それが我田引水、自己満足にならないよう専門家に外部評価をお願いする。外部評価委員に対しては忌憚のない厳しい評価をお願いしてある。この事業が、現在そして将来の学生の利益のために行われるものであるからである。

そのために労をおしまなかった関係者にはセンター長の職に在る者として心から感謝をささげたい。